ハロー・ディア・エネミー！

平尾　美智子

私の家の小さな庭に、一鉢二鉢とふやしていった鉢花が、今ではいつのまにか、五十鉢近くになっている。一方で私は幼稚園在職中に園の畑の実践に生かそうと、家の近くで畑作りを始めていた。二十年前に勤務していた幼稚園で担任した園児の父が、減反政策の一つとして、無償で土地を貸してくれた畑である。

畑作りと草花を育てることを同時にやってきたが、水やり、霜よけなど、一つ一つの草花の生態をよく知り、こまめに育てなければ、たちまちのうちに枯れてしまう。それは子育てによく似ている。

二、三年前から山野草も育てはじめたので、また難

しくなった。三十年間、立山連峰の自然を守る会の運動をやってきた私は山野草を入れることに抵抗があったが、いつのまにか山野草の魅力にとりつかれてしまった。

二十年も前になるが、T短大附属幼稚園の創立にかかわった時、上司として、保育行政の官僚畑からA先生という大正生まれの五十代の女性が就任してきておられた。私のように幼稚園の中だけで育った保育者と違って、小学校の教師をした後、保育所の保母として勤務し、行政の中にも席をおいておられたキャリアの厚い先生であった。

A先生は口調はソフトであったが、いったん、激するとすごい形相で私たち職員を叱責し、なんとなく馴染めなかった。イタリアのマリア・モンテッソリーの教育観とメソッドを保育の中にとりいれることに情熱を注がれ、そのカリスマ的言動の中には、強い圧迫感があった。遊びの中で子どもの発達を考えていこうとする私の保育観と違い、A先生は、手作業を中心とした課題活動を重視し、ごっこ遊びなどにも否定的であった。

その上、熱心のあまり、私たちにも私費でモンテッソリー教育のテプロマ取得を半ば強制的に促されたので、そのころ、主任教諭であった私は、A先生にまっこうから反対し、職場でよく口論した。そのため私は、村八分のような立場に追いこまれ、苦しみながら、京都の深草にあるモンテッソリーの研修会に毎週一回必ず行き、遠くイタリアのペルージャへも赴いた。

だが、宿敵のような存在であったA先生も、熱意が嵩じて、若い先生の結婚や妊娠に際して、人権無視の態度をとられたため、かえって自分が退職せねばならぬ窮状に追いこまれ、就任後、わずか六年で退職なさってしまった。A先生の退職後、私がその後任となり、保育と園内の管理責任者としての任務

を負った。初めは解放感があったが、しだいに孤独と苛立ちにさいなまれ、A先生の苦衷がよく理解できるようになった。どうしてあのとき、A先生の長所を受け入れ、私が支えになってもっと協力してあげなかったのか。大学当局との予算の折衝、幼児教育学科との理論と実践の矛盾、特に教育実習についての保育現場の主体性の確立など、保育現場の責任者としての重責を思うとき、私がA先生にとってきた自分の態度に深く反省させられた。

それでも、創立後六年間は定員にすら満たなかった園児数も定員をはるかに越え、クラスも増設した。大学や大学院卒の先生、男性保育者の採用など、新しい風を入れ、園は一定の軌道にのって発展し、県外からの見学者も多くなった。こうして私も苦節二十一年、ようやく定年を迎えた。定年になって、二、三年後のある日のこと、二十年ぶりにA先生から電話がかかってきた。

「お元気ですか？一度、私の家に遊びにいらっしゃいませんか」

A先生はソフトな口調でささやくように言われた。

私は一瞬どきりとしたが、何かいいようのしれない懐かしさがこみあげてきた。

在職中、A先生の考え方と一致したのは、子どもと自然に対する考え方であった。

特にA先生の花壇作りの作業の手順には目をみはるものがあった。動物の放し飼いも一致した考え方だった。A先生と北海道へ旅したとき、目にした小川の囲いをヒントに、園庭に小さな川を子どもたちと共同で作ったのも、A先生の支えがあっての私の実践であった。

誘われるままにA先生のお宅を訪れてみると退職なさってすぐに、「モンテッソリー子どもの家」を自宅で開かれていたが、その日は教具などは室内の片隅に片付けられていた。室内の中央の展示台には、見事に育てられた山野草の花々が飾られ、会のメンバーの人たちがA先生を中心に熱心に一つ一つの作品に目を注ぎ、語り合っておられた。そして、A先生の花をみる目は慈愛にあふれていた。

*

現在、世界で紛争のおきている国が五十か国以上ある。民族内部の紛争が多く、その原因はかってないほど、複雑になっていて、従来は紛争から外されていた子どもや女性が、最も大きな犠牲者となっている。昨年は国際児童図書年であり、私の所属しているJBBY（日本児童図書評議会）では、「平和、自由、寛容、反戦」の精神を謳いあげ、特に寛容の精神を重視して、「ハロー・ディア・エネミー！」[注]の国際絵本展示が日本でも各地で開催された。

*

二十年前私がA先生と園内で大きな声で口論していた姿を子どもや学生たちがどう見たか、それを考えるとぞっとする。A先生は私に山野草の苗を下さり、育て方を教えて下さった。私はその中でも「ヒナ草」と「いわうちわ」の花の咲くのを楽しみにしていたが、四月になってもなかなか花が咲かなかった。

だが、桜が散りそめるころ、私は庭へ出てみてほっとした。「ヒナ草」の鉢の中に、るり色の小さい四つの花弁をもった三ミリ四方の花がいくつも咲いて、「ピヨピヨピヨ」と謡っているようだった。そして、「いわうちわ」の小さな葉の陰にもピンクの小さな花がほんわりと咲いていた。私は花たちに

▲展示された「平和、自由、寛容、反戦」の絵本（富山の大島絵本館）

小さな声で思わず「ハロー・ディア・エネミー！」と言った。

（日本国際児童図書評議会会員）

注

ハロー・ディア・エネミーの運動について

過去の戦争は国と国が行うもので基本は兵士が前線で戦っていた。しかし、現代の紛争は民間人を含む死傷者が九十パーセントを占め、その半分が子どもである。民族や宗教間の違いから根の深い紛争へと泥沼化し、第二次大戦後、戦争の性格が変ったことで攻撃が人々の生活に密着した形で深刻な影響が出ている。

一九八九年、国際連合で「子どもの権利条約」が採決されてから十周年を迎え、私達は子どもの人権を脅す紛争のない世界をめざして、積極的に行動しなければならない。

「平和、自由、寛容、反戦」の絵本の展示会、「ハロー・

▲初日、七夕飾りの下で展示された絵本を見る学生たち（大島絵本館）

ディア・エネミー」（敵さん、今日は）の運動は一九九四年一月ミュンヘンで始まり、その結果、十九か国、四十一冊の絵本にしぼり、幼い子どもたちの平和を育む力強い原動力となって世界を駆けめぐっている。

ＪＢＢＹ（日本国際児童図書評議会）でも、この絵本による啓蒙が各地で行われ、富山では、大島絵本館で昨年の八月二日から十六日まで行われ、私も展示会場で啓蒙活動を行った。又、生協の青年部、婦人部に招かれ、講演会を行った。

二十一世紀に平和な世界をめざして、大上段にかまえるより、学校や地域、家庭、職場でも寛容ということの大切さを、私達の日々の小さな行為を通して、私達の心と精神を地道な形で育んでいくことが、今、最も大切なことではないかと思う。